

昔ながらの盆踊り

藤原 道夫

日本に着いて間もなく R. ハーンは帝国大学文科大学に B. H. チェンバレイ教授を訪ね、次のような助言を受けた。「日本の第一印象は、できるだけ早く書き残しておきなさい。……初めての印象ほど、心が動かされることはないでしょう」すぐに実行する余裕はなかったにしろ、ハーンは忠実にこの助言を守った。それは『日本の面影』の「盆踊り」に読み取れる。

教授の推薦により、ハーンは松江に赴任することとなる。「はるかな山々を越えた向こうに、古代の神々の国出雲がある」— 気持ちは昂っていたであろう。人力車で中国山塊にある上市（うわいち、島根県中新川郡上市町）に達し、ここで一泊した。宿の居心地、調度品、料理などをことごとく褒めちぎっている。その晩は村の盆踊りが催される日だった。同行していたアキラが言う「ここなら昔ながらの盆踊りを見学できますよ」。

少女らによる盆踊りをみて、ハーンはすっかり心打たれ「それは、想像を絶した、何か夢幻の世界にいるような踊りであった」、「この眠り薬でも飲んだように魅了されていく感じは、その場のしんとした静けさによって、いっそう強められてゆく。……何か太古のもの、もしかしたら、薄明の神代の時代から存在したものを目にしているのではないだろうか」と記している。さらに「西洋のメロディなら、それが、私たちの胸に呼び起す感情を言葉にすることもできるであろう。……あの音色は、音符に移しかえることさえできないのではないだろうか」という。このような盆踊りは、今でもあるのだろうか？

ハーンンの異文化を受け取る気持ちの優しさに感動しながら、自分の体験を重ねてみる。一度は見たいと思っていた「おわら風の盆」の見物が漸く4年前に叶えられた。そして胡弓・三味線・太鼓の伴奏による唄と女踊り・男踊りにすっかり魅了されてしまった。現地（富山市八尾町）は大変な人出だ。それだけに、日本人の心を捉える何かがここにはあるに違いない。それは自然への畏怖と敬意、遠い昔らの先祖へ鎮魂、豊作の祈願と感謝などがなくないまぜになった心象だろうか。昔ながらの盆踊りが、多少形を変えながらもここに残っているように思うと、胸に迫ってくるものがあつた。